

失敗は「生きる力」の糧になる

上 廣 哲 治

書店の児童書コーナーで、変わったタイトルの本を見つけました。「失敗図鑑 すごい人ほどダメだった！」（大野正人著・文響社）『さんねんな偉人伝 それでも愛すべき人々』（真山知幸著・学研プラス）の二冊がそれです。目次を開いてみると、そこには偉人伝によく登場する、例えば発明家のエジソン、物理学者のインシュタインやニュートン、作家の夏目漱石など、錚々たる人物の名が並んでいます。しかし、本のタイトルからもわかるように、かつて親しんだ「偉人伝」とはアプローチの仕方がまったく異なっています。

これまでの偉人伝であれば、その人物がいかに輝かしい業績を上げ、いかに優れた人物であったかなどと、成し遂げた業績の大きさ、人間としての偉大さに光が当てられていました。その功績によって文明は進み、文化は豊かになったと称賛したのです。文明・文化の進展に大きな足跡を残した偉人たちは、あたかも夜空に輝く星々のように見上げる存在でした。それは、立派な生き方のお手本として見習うべき対象、目指すべき目標でした。

紹介した本も、確かに偉人伝ではあるのですが、登場する人物たちは、星のように見上げる存在としては描かれていません。むしろ反対に、あえて偉人たちの失敗や変わった性癖などがやや誇張されて紹介されています。では、どのような意図でこの偉人伝は書かれたのでしょうか。

『失敗図鑑』では、本編にも登場する発明王・エジソンが、この本のねらいを、読者である子どもたちに向かって次のように語ります。

「わしは失敗するたびに（へうまくいかなない方法）をひとつ発明しているのじゃー たとえ、10000回失敗しても、それは（10000回うまくいかなない方法を発明した）だけのことじゃー（略）10000の失敗なしに1の大成功を作ることではきんのじゃー！」「失敗してよくよする人もおるが、それは、失敗になれていないだけじゃ。わしは言いたい！ みんなもつと失敗しなさい！」「いわゆる（偉人）たちの失敗とその失敗から、かれらがどうやってふつかつしたかをしようかいする」

『さんねんな偉人伝』の「まえがき」にはこのように書かれています。

「偉人がなしとげた業績と、そのための努力を知れば知るほど、（略）（自分のような、失敗ばかりしている人間は、彼らのようにはなれない）（と思うかもしれない）／しかし、それは大きな誤解だ。（略）偉人と呼ばれる人たちもまた、私たちと同じように欠点があった」「完璧な人たちが偉業をなしとげたのではなく、むしろ、人一倍人間くさい人たち、ダメな部分がある人たちが、大きな夢を実現させている、ということを知ってほしい」

偉人と呼ばれる人々も、私たちと同じように欠点を持ち、数々の失敗を重ねているのだから、少しの失敗や欠点に挫けることなく、自分の思う通りに生きなさいというメッセージが送られています。

私は、生き方の手本としての「偉人伝」から、失敗を誇張した人間くさい「偉人伝」への変化に、グローバル化（地球規模化）の影響で大きく変化した私たちの社会、生き方を思わないわけにはいきませんでした。

東西冷戦構造が崩壊し、すべての国々が自由に交流できるようになると、インターネットなどの情報通信技術の発展もあって、国や地域などの地理的な境界を越えて、すべての人々が交流できるようになりました。自由な交流は、国や地域の独自の文化や常識と思われていた価値観に揺らぎをもたらしました。自国の常識が、世界では通用しないのです。

グローバル化以前の日本社会では、日本人同士であれば、いちいち説明しなくとも阿吽あうんの呼吸でわかり合うことができました。例えば働き方も、仕事量が多くなれば、休日出勤などをして片付けるのが当たり前でした。こうした社会では人よりも豊富な知識があり、実務に長け、与えられた課題を素早く処理できる人が尊重されました。仕事の仕方が決まっているのですから、それを効率的に正確にこなせる人です。逆に、失敗は咎められました。ですからグローバル化以前の社会では、生き方の手本としての偉人伝からそうした能力を学ぶ意味があったのです。

ところが、グローバル化以後の現在の社会では、仕事量が多いなら休日出勤をして片付けなさいと言っても外国の人には通用しません。なぜそうしなければならないのか、相手が納得できる説明をしなればならないのです。知識と実務能力、努力する力だけでは通用しない。相手の気持ちを想像して理解し、納得させて、しかも自分も納得できる説明を考え出さなければなりません。今までの常識が通用しないのです。そのときに、試行錯誤を重ねて得た経験値や創造的な考え方が役に立つのです。その

経験値を高めるためには失敗を恐れぬ行動力が欠かせません。求められるのは、行動力と失敗から学ぶ考える力、加えて少々の失敗でも挫けないたくましい心でしょう。人間くさい偉人伝は、グローバル化以後の社会を生きる勇気を、子どもたちに伝えようとしているのではないのでしょうか。

私は夏の全国錬成会で声を大にして「大いに実践で失敗すべし」と、やや極端なことを申しました。もちろん失敗を勧めているわけではありません。失敗を恐れて実践を踏みとどまってはならないということです。失敗を糧かぢにして、そこから学び、経験値を上げる意義を訴えたかったのです。「失敗こそが、次のステージにジャンプするための糧になる」と申したのはそういうことです。では、失敗からどのように学ばいいのでしょうか。実はそのノウハウが会の教えの中に込められているのです。

失敗をしたらまず、自らの責任で失敗したという現実をありのまま素直に受け容れなければなりません（「現実大肯定」）。そこから失敗に学ぶのです。学ぶ意志があれば、ほんの些細な事柄からも学ぶことはできます（「万象わが師」）。そのためには、いかなる実践も、自分が主体的に行ったものでなければなりません（「随所に主となれ」）。このようにして得た経験値は、「生きる力」を育み、人をたくましく成長させるはずで、「大いに実践で失敗すべし」です。

そこで今月の実践課題です。「いきなり立つ赤ちゃんはいない」のです。何度も転んで、泣いて、また転ぶ。こうした経験を繰り返す先に、ようやく歩けるといふ結果が待っているのです。ですから、成功や失敗という価値観に縛られるのではなく、一つの「経験」として捉えましょう。成功か失敗かは結論です。大事なことは、経験を積んで徐々にできるようになったというプロセスなのです。実践とは、経験を増やし、そのプロセスを通して成長することなのです。